

香港作家・西西と「動物」

西 野 由希子

はじめに

《動物嘉年華－西西の動物詩（動物のカーニバル－西西の動物詩）》¹⁾は、西の書いた動物に関する詩23編に香港の画家たち27人が挿絵などを寄せて制作された詩集である。本はA4の横置きより少し縦が長く横が短い、縦22センチ、横28.5センチのサイズ。表紙には人の左の手のひらに乗った狒々が白い紐を握り、紐がぴんと張られるように人の右手が右側で紐を持っている絵が使われていて目をひく。タイトルは中国語と英語で書かれていて、右下に中国語と英語の「バイリンガルエディション」と記載があり、西西の詩の英文の訳も載っていることがわかる。裏表紙にも記載されているように、子供向けの絵本というよりは大人向けの詩画集である。

2022年7月に出版されたこの本の序文で、同書の企画者である何福仁²⁾は、これは西のこれまでの作品《縫熊志（テディベア物語）》³⁾、《猿猴志（猿たちの物語）》⁴⁾を引き継ぐものだと書いている。

西は1937年上海生まれ、1950年に家族と共に香港へ移り学校に通った。学生だった1950年代に創作を始め、香港文学を代表する作家の一人として多くの読者や文学界の仲間たちから敬愛されてきた。2022年5月に第16回香港芸術発展賞の「終身榮譽賞」⁵⁾を受賞し、10月にはそれを記念した展示が商務印書館尖沙咀図書館センターなどの会場で開かれ、公開講座等も開催されたが、この展示会場には出版から間もない《動物嘉年華》の絵が多数使用され、会場を彩った。

本稿では、動物をテーマにした《縫熊志》、《猿猴志》と《動物嘉年華》の3作品を中心に、西西が「動物」をどう描いて来たか検証する。そして香港の文学・芸術界が近年、「植物」や「動物」に注目していることとの関係を考察する。

1 「ティディベア」による表現－《縫熊志》

2009年、香港三聯書店から刊行された《縫熊志》は、ぬいぐるみの制作から生み出された本である。まず、この本の出版に至る経緯を確認する。

西西は創作の初期から詩、小説、コラム、散文などさまざまな形式で作品を発表し、早くから独特の個性を持った作家として評価されていた。1979年にはこの時期の代表作《我城》を出版、1986年には《浮城志異》を発表するなど活発に創作を行う。1989年に乳がんになり手術を受けるが、その後、次第に右手で文字を書くのが難しくなる。このうち西西は左手で文字を書いて作品を発表するようになるのだが、不自由な右手のリハビリという目的で始めたのが熊のぬいぐるみ、ティディベアの制作であった。

香港文学研究者である王家琪は2019年7月に行った何福仁へのインタビューで、以下のように問いかけている。右手が不自由になったあと、西西が行ったティディベア、猿、ドールハウスの創作活動に、何福仁は常に協力し、ティディベアの先生を紹介したり、材料を探すのを手伝ったりしている。一緒にドイツのティディベア作家を訪ねてもいる。これらの活動は二人で進めたのだから、上記の作品は二人の共同制作と言ってもいいのではないか。それに対して、何福仁はこう答える。「私はそばにいて協力しただけだ。彼女になにか必要なことがあり、私にできることがあればやる。彼女が左手で原稿を書くと、私がそれをスキャンし、入力する会社に回す。戻って来た原稿を西西が校正し、その後、出版社に渡す。必要な本や参考資料があるときは私が探し、創作の参考にする。」⁶⁾ 何福仁は「共同制作と言えるのではないか」という王家琪の投げかけに正面からは答えていないが、左手を使って書くようになった西西の原稿がどのように活字になったか語られている点は興味深い。《縫熊志》には、冒頭に何福仁による〈序〉があり、末尾には西西と何福仁の〈対談〉が掲載され

ている。西西の〈後記〉には、同書に掲載されているテディベアの写真の一部は何福仁がデジタルカメラで撮影したものだということも書かれている。王家琪はテディベアの先生を紹介したのも何福仁だったと言っており、この本の成立の過程で何福仁が果たした役割は相当に大きいと言える。

そもそも西西がなぜテディベアを作り始めたかということについては、〈対談〉の中で説明されている。「はじめは粘土細工を習ったが興味が持てず、細かい作業すぎて手と目にも合わなかった、それでテディベア作りを習った。」西西は以前よりドールハウスが好きで、自分でも作っていたので、ミニチュアの道具や人形の制作には関心があったと思われる。はじめは自己流で、本を見て2時間で1体のテディベアを作ってみたが、熊ではなくネズミみたいだった。市街のある店でぬいぐるみの材料のモヘアを見ていて、店の主人と会話になり、彼女に教えてもらうことになった。最初のテディベアは「黄飛熊」と名付けた。サイズが小さく、オランダ、ドイツ、イギリスなどへの旅行にも連れて行った。習い始めて数か月後に、先生から大会に出ることを勧められた。3体セットのテディベアで応募するということがだったので、《水滸伝》の九紋龍史進を作り、さらに燕青、時遷、楊志など水滸の兄弟たちを作った。いろいろなタイプのテディベアの作り方を学んだあと、中国の古代の服装を身に着けた熊たちを作った。〈対談〉で、西西はこのようにテディベア制作の過程を説明している。⁷⁾

刊行された《縫熊志》は、三部構成になっている。第一部〈中国古代服飾熊（中国古代の服装の熊たち）〉は、西王母、嫦娥など神話の人物から始まり、春秋時代の西施、戦国時代の屈原、漢の司馬遷、魏晋南北朝は王羲之や陶潜、唐は玄奘、さらに宋、元、明と続き、清の曹雪芹まで、各時代の著名人として作られたテディベアが並ぶ。第二部〈故事熊（物語の熊たち）〉は〈花木蘭〉、〈水滸英雄（水滸伝の英雄）〉のほか、西西がストーリーを考えたオリジナルの熊たちの写真が掲載されている。写真とそのキャプションだけで文章はないものもあるが、写真を見ているだけで自然に物語が浮かんでくる。第三部〈毛熊與我（テディベアと私）〉には、テディベアをドイツに旅行させたというエッセ

イなどのほか、西西と何福仁の対談〈毛熊與漢服(テディベアと中国伝統衣装)〉が掲載されている。〈対談〉では、何福仁が聞き手となり、上記で紹介したように西西がどのようにテディベアを作るようになったか、また、テディベアに着せる衣装の参考のために文献を調べているうち「中国古代服飾研究」の域に入るほどになったことなどが語られている。

《縫熊志》は、かねてからの西西文学のファンに歓迎されただけでなく、テディベアや人形などが好きな読者からも喜ばれた。独創的で衣装や持ち物などディテイルにも凝ったテディベアたちの写真は見ていて飽きないし、西西の持ち味であるひねりのきいたエッセイとの組み合わせも楽しい。ユニークな作品である。⁸⁾ 筆者はこの本の出版によって、西西が以下の3つの点を新たに獲得したことを指摘したい。

まずは、西西が文章による創作から、「テディベア」作品という新しい表現方法を獲得したことである。西西は美術への関心が高く、自分でもイラストを描く。小説《我城》やコラムの挿絵として自作のイラストを使うことがあったが、「テディベア」や「ドールハウス」など立体的な「もの」を作ることにしても、趣味の「遊び」から、自らの創作活動、表現方法としての段階に一歩踏み出したと言ってよい。文字による表現を中心とする作家から、アーティストやクリエイターと呼べる活動に幅を広げたのである。この点で《縫熊志》は出発点となった作品である。

第二に、刊行する本のデザインや構成に、より工夫するようになったことである。西西は1973年10月から74年2月に《快報》のコラム欄〈剪貼冊〉に約150篇のコラムを書き、1991年にそれらをまとめて台湾・洪範書店から《剪貼冊(スクラップブック)》のタイトルで出版している。このコラムは、1枚の絵や写真と500字ほどのエッセイが並んだもので、本に編集された際も見開きのページに1篇ずつ絵と文章が収まるように作られている。1995年の《話／画本(絵画と文章)》⁹⁾、2001年の《拼图遊戲(ジグソーパズル)》¹⁰⁾も、西西がさまざまなメディアに書いたコラムを集めたもので、同じく1枚の絵や写真と文章の組み合わせというスタイルになっていて、西西のエッセイ独特のスタイ

ルとして確立している。《縫熊志》も写真とエッセイで成り立っていて、第一部には文章と写真が左右の見開きになっているものがある。これまでの本のスタイルを引き継いでいるとも言えるが、写真が何枚も使われて見開きではおさまらないテディベアもいる。第二部では写真の比重がさらに増える。〈斑馬鼻子家族（しましま鼻のファミリー）〉には文章がなく、7枚の写真と短いキャプションだけで構成されているし、〈圍巾党（スカーフ党）〉も写真だけだ。明らかにこれまでのコラム集、小説集とは異なる形式になっていて、写真で見せる物語になっている。《縫熊志》はビジュアルや本の構成などが十分に企画されて作られていて、本そのものがアート作品なのである。この点も次の《猿猴志》に継承される。

第三は、西西が「動物」への新しい関心を獲得したということである。《縫熊志》は「テディベア」の本である。何福仁が〈序〉で述べているように、この本の出版当時、制作したテディベアに中国の伝統的な衣装を着せることはあったとしても、西西のように、歴史上の人物や文学作品の登場人物などを「テディベア」として造形し、場面を想定し、服装に関する時代考証を行ってデザインした衣装を着せ、道具を持たせるという発想はそれ自体がとても斬新だった。西西はこの本にテディベア「黄飛熊」と旅行したときの写真を載せているが、近年、ツイッターなどのSNS上に、さまざまな「ぬい旅」「ぬい撮り」が日々アップされ、ファンの間で楽しまれていることを思うと、西西はまさに「ぬい旅」の先駆けだったと言える。また、ヨーロッパのテディベア作家を訪ね、気に入った作品を購入して大切に、クリスマスには新しい服を着せて写真を撮っているという話などもファンやコレクターには響くエピソードだろう。

一方、動物としての「熊」についてはどうか。何福仁の〈序〉では中国の古典の書物に出てくる「熊」について触れているが、これは文学や言語の話題であり、生物・動物としての熊の話ではない。西西が動物の「熊」に言及しているのは、第二部〈故事熊〉の〈受傷的月熊（傷ついたツキノワグマ）〉である。¹¹「我が国にはパンダがいる。ツキノワグマもいる。パンダは国の宝とみなされているけれど、ツキノワグマは？」で始まる短いエッセイは絶滅危惧種

であるツキノワグマが漢方薬のために飼育されて傷ついている、と訴える。2枚の写真では傷ついたツキノワグマのテディベアがベッドに横たわり、8体のテディベアたちが心配そうに見守っている。次の一編〈熊友（熊の友人たち）〉では、シロクマを含め、さまざまな色や姿の熊たちが並んでおり、西西が「ぬいぐるみ」の熊、物語の熊のことだけではなく、動物・生物としての熊についても関心を持ち始めていたと推測することが可能である。この点において、次の《猿猴志》は《縫熊志》から大きく変化する。

2 サルの「図鑑」－《猿猴志》

《猿猴志》は2011年、台湾・洪範書店から刊行された。表紙や裏表紙にも、またそれぞれの「サル」の項目ごとにも、西西が作った猿の「ぬいぐるみ」の写真が使われている。50体以上の「ぬいぐるみ」が制作されているが、《縫熊志》のテディベアと違い、種ごとのサルの姿かたちで作られている。ぬいぐるみであるため、かわいらしさや手作りのあたたかみも感じられるが、服などは着せておらず、あくまで「動物」としての特徴を表現しようとしている。その点から見ても《猿猴志》は《縫熊志》を継承してはいるが、本のコンセプトははっきり異なっている。

《猿猴志》の〈前言〉で、西西は、この本の企画を何福仁に相談したところ、彼がすぐに6つの対談のテーマを挙げてきた、と言っている。西西の猿についての理解は「講読、視聴、討論、縫製、執筆の中でだんだんと深まった。それは学習の過程だった」と書かれている。¹²⁾ 先に紹介したように、王家琪のインタビューの際、何福仁は「共同制作」と呼ばれることへの返答を避けているが、《猿猴志》においても何福仁の果たしている役割は大きい。猿の本を出したいという西西の考えから始まっているが、全体の構成や内容については何福仁が多くの提案を行い、彼のさまざまな協力によってこの本はできあがっている。中でも二人の「対談」は本書の要である。

本は、全体が4つのパートで構成されている。〈前言〉のあとは最初の対談〈サルの命名、分類、分布〉で、読者はサルについての基本的な知識を得る。

続いて7種の「原猿」の紹介ページがあり、〈西洋における猿の形象〉と〈中国の猿の物語〉の2つの対談で第一のパートが締めくくられる。第二のパートは、7種の「新大陸」のサルが紹介され、対談〈動物園と飼育センター〉で終わる。第三のパートは9種の「旧大陸」のサルのあとに対談〈進化の問題：サルは私たちの先祖なのか〉が置かれる。最後のパートは6種の「猿類」と対談〈名前、作品〉で締めくくられる。その後には〈絶滅危惧種の霊長目〉という紹介があり、サルの生態についての学術的資料や〈霊長目総表〉などの〈付録〉が付けられている。各サルのページには、生物学的な分類の説明欄もあり、エッセイ部分でもそのサルの生態や特徴が詳しく紹介されていて、西西の他のエッセイに見られるような芸術の話題や関連するエピソードへの「逸脱」などはない。西西文学のファンや、表紙を飾るかわいいサルのぬいぐるみに惹かれてこの本を手に取り、読み進めた読者は、世界中に生息するさまざまな種のサルについて詳しくなるだろう。これは世界のサルの「図鑑」という性格の本なのだ。西西の制作したぬいぐるみやマンガのようなイラストによって、雰囲気はやわらかいが内容はまじめで学術的なのである。

この本以前にも、形式やデザインと内容にギャップのある作品、時間軸に沿ってストーリーが進むような形式をとらない作品を西西は送り出してきた。エジプトの一人のファラオの生涯を書記官トトが記録した碑文という形をとる1984年の〈図特碑記（トト碑記）〉、13枚のルネ・マグリットの絵を使った86年の〈浮城志異（浮城の物語）〉などもそうである。1992年の《哀悼乳房》¹³⁾は乳がんを患った西西がその悲しみや思索の中で生み出した一冊で、乳房、病、治療、命などをテーマに創作された詩や短編、世界の文学・芸術から引用されたフレーズや画像など30編が収められる。96年の《飛氈（空飛ぶ絨毯）》¹⁴⁾は西西が生み出したまち「肥土鎮」の物語や歴史、そこに暮らす人々のエピソードが次々と語られる。つながっていない断片から、しだいに複雑な模様の絨毯が織りあがっていくように全体像が見えて来て、肥土鎮のことがわかってくる。こういった実験的な創作は、西西がイタロ・カルヴィーノやホルヘ・ルイス・ボルヘスらから学んだものだ。これらの作品と並べて考えてみれば、《猿猴志》

が「サル」の図鑑や「猿の博物誌」と呼べるような形式で作られていることは作品によってスタイルを変える実験文学の書き手である西西らしいと言える。

前章で、《縫熊志》の制作によって西西が3つの点を新しく獲得したと述べたが、コンセプトに沿って本全体がデザインされ、構成されている点において、《猿猴志》は《縫熊志》の発展形とすることができるだろう。

「動物」としての「サル」をテーマにしているため、内容は《縫熊志》のように空想的、芸術的ではなく、現実的である。西西は動物・生物としての「サル」に明確に関心を持っており、自ら学習してサルについての認識を深め、学術的な知識を盛り込んだ「サルの本」を作った。この本によって世界の「サル」に関心を持ってほしい、「サル」の置かれている状況を知ってほしいという西西の思いが読者に伝わる。

だが、学術的な本を作るのなら、それぞれの種のサルについて、西西が制作した「ぬいぐるみの猿」の写真ではなく、撮影された実際のサルの写真を使う方が適切とも言える。「図鑑」は通常そうである。「ぬいぐるみ」の写真を使ったのはなぜか。子供やぬいぐるみ好きの読者、手芸のファンなどにも手に取ってほしかったかもしれないが、その目的のために「ぬいぐるみ」にしたのもなさそうである。結局は、西西が「ぬいぐるみ作家」だったために到達した着地点だったのではないか。サルの本を作りたい、サルのぬいぐるみも作りたいという思いにより、一般的な「サル」の図鑑とは違う不思議な本ができあがったのである。西西の制作した「サル」たちは、写真と比べてみてもよくその種の特徴を掴んで作られているが、同時にどこかにほのぼのとしたかわいらしさがある。そこに「ぬいぐるみ作家」である西西の技量や個性が現れている。ぬいぐるみも、この本も、西西という作り手だからこそ生み出された作品なのである。

3 「肥土鎮」の動物たち－《動物嘉年華》

2009年の《縫熊志》、2011年の《猿猴志》から10年が過ぎた。西西は香港文学の作家の中で「長老」と言える世代となり、英語等による翻訳や紹介を通して海外でも知られるようになる。毎年秋の発表の時期にはノーベル文学賞の有

力候補という情報がメディアに出るようになった。本稿冒頭に紹介したように2022年には香港芸術発展賞の「終身榮譽賞」を授与され、《我城》などこれまでの作品も新しい読者によく読まれている。2019年にはエッセイ集《我的玩具》、2021年には長編の歴史小説《欽天監》¹⁵⁾、2022年4月には近年の新しい作品を収めた短編小説集《石頭與桃花》¹⁶⁾、7月に何福仁がプロデュースした詩画集《動物嘉年華》が刊行された。

西西の作品で最初に雑誌等に発表されたのは、中学生だった1953年、文学雑誌《人人文学》に掲載された〈湖上〉という新詩である。以降、彼女はずっと詩を書いてきた。何福仁は《動物嘉年華》の〈前言〉で、西西は自分の作品に自ら挿絵をつけたりもしてきたので、長年、絵本を作りたいと思っていた。30名近くの芸術家が彼女の詩に絵を描き、一緒にこの本を出版できたことを喜んでいる、と言っている。¹⁷⁾ 新作ではないが《動物嘉年華》には西西が以前に描いた猫のイラスト8つが要所で効果的に使われていて、出版社はその絵柄のピンバッチも制作し、販売した。この本の刊行から半年もたない12月18日、かねてより療養中だった西西は亡くなった。《動物嘉年華》は、詩で文学界に登場し、詩人、小説家、コラムニスト、ぬいぐるみ作家など多彩に活躍した西西の生前最後の出版物となる。

23篇の詩で取り上げられている動物はさまざまである。マンモス、雄鶏、ヤモリ、ライオン、テナガザル、アルパカ、クラゲ、ホッキョクグマ。猿では、狒々、スローロリス、金絲猴、アイアイ。猫は〈友だちの猫〉、〈故宮の猫〉などの数編に登場する。〈恐ろしい動物〉、〈想像上の動物〉、〈なにかわからない動物〉という題名の詩もある。テディベアの詩も1編ある。動物のバラエティは「カーニバル」というタイトルにふさわしいにぎやかさであり、1編ずつ風格の異なる絵が寄せられているのもこのタイトルに合っている。

本タイトルに取られた〈動物嘉年華〉は23の詩の最後に置かれていて、この本全体を象徴する詩である。146行と本書の詩の中で最も長く、12の節に分かれている。西西がシリーズで書いてきたまち「肥土鎮」が舞台の物語詩である。

「肥土鎮には以前動物園があったのだけど／その後閉めた／動物を檻に入れ

ることにみんな反対だったから／動物たちももちろんずっと抗議していたのだけれど／それを聞きとれる人はいなかったのだ／数年たって／肥土鎮に新しい動物園ができた／「図像動物自由園（画像の動物フリーダムパーク）」だ／動物はみな木や毛糸や布でできている／あるものは彫刻／あるものは絵／文字のものもいる／あるものは、見る人の想像力をかきたて／3D動画が生み出される／園内にはないのは、檻だ／動物たちはみな自由自在／だって画像なのだから／動物はマスクを着ける必要はない／みなウイルスには感染しないと保証されている」。¹⁸⁾ 第1節はこのように語られる。続く第2節の冒頭で「動物園には子供たちがたくさん来る／花可久も来た／猫の友だち花花もいっしょだ」¹⁹⁾と、「肥土鎮」シリーズのヒロイン花可久が登場し、第3節で、猫の花花と動物たちを写真に撮る。パークにはハスの池があり、動物たちが意見を述べあうスペースもある。運動会が開かれる。高齢の動物たちには保障があり無料で医療を受けられ、のんびり将棋をさしていたりする。図書館と創作ルームがある。ここで作品を作った子供たちは世界中へ行ける。視野を広げ、さまざまな動物と知り合う。肥土鎮の「フリーダムパーク」は自由で平等、平和で幸せに暮らせる、動物たちにも子供たちにも夢のような場所だ。

他の詩では、動物たちはこのような理想的な環境にはいない。〈失去猛犸象的語言（失われたマンモスの言葉）〉ではマンモスは長い孤独のために話す力を失う。一億年後、人類が絶滅したときに人類の言語は残っているだろうか、と西西は問う。²⁰⁾ 〈北極熊〉では地球温暖化への不安、〈長臂猿（テナガザル）〉ではテナガザルに会いに行きたいけれど動物園に暮らす姿は見たくないと歌われる。1編ずつ詩を読んでいくと、「カーニバル」ということばの持つ明るさやパワーよりも、祝祭の裏側や夜の部分とでも言うのか、動物たちの抱えている悲しみや影のようなものが強く感じられる。

ここまで見てきた3つの作品《縫熊志》、《猿猴志》、《動物嘉年華》には確かに引き継がれてきた共通点がある。第一に、それぞれデザインに工夫したビジュアルな本であり、ぬいぐるみとその写真、絵と西西のエッセイや詩が相互に響きあう作品だということだ。西西の創作の特徴とされる「図文互渉」はこ

おわりに 香港文学と「動物」「植物」

西西の1988年の小説〈肥土鎮的故事（肥土鎮の物語）〉²²⁾では、そのまちがなぜ「肥土鎮」と呼ばれるようになったかという由来が語られる。花艶顔と花可久の姉妹に対し、おじいさんとおばあさんが、天から土が落ちて来たから「飛土鎮」、亀の背中で浮かんでいるから「浮土鎮」だと話す。姉妹のおじである2人の科学者が「肥料」を作る実験を行った結果、植物を巨大に成長させる「土」ができあがり、それを売り出してまちは発展。それからまちの名前は「肥土鎮」となる。西西は、この「肥土鎮」のまちを舞台にした物語を書き継ぎ、1996年の長編《飛氈》がその集大成とされている。一連の作品は「肥土鎮」シリーズと呼ばれているが、「肥土鎮」の始まりには「植物」が重要な役割を果たしていた。本稿では「動物」に関する3つの作品を取り上げたが、西西の作品は「動物」だけではなく、「植物」から読み直すことも必要と思われる。それは近年、世界の文学・芸術において、また香港の文学・芸術の分野でも「植物」や「動物」が重要なキーワードになっているからでもある。

世界の文学・芸術の創作や批評・研究において「動物」や「植物」を含む自然や環境への意識が高まっているのは、気候変動、地球温暖化等の問題が看過できなくなっている現状と関係する。しかし香港においてはそれとは異なる背景で「植物」や「動物」への関心が高まっているように見える。

2018年に香港文学館が企画して刊行した《自由如緑（自由は緑）》²³⁾は、24人の香港の作家が植物について書いた詩や散文、小説を集めて作られている。画家・姚柱東による美しいポタニカルアートの挿絵、落ち着いた緑色を基調とする装丁や本全体のデザインもこの本の魅力である。西西はこの本の執筆者として参加していないが、何福仁が〈法国梧桐（プラタナス）〉という散文を書いていてそこには西西も登場する。

西九文化区は香港政府の主導により2000年代以降、大規模な開発・建設が進められている文化・芸術エリアである。埋め立てられ造成された土地に次第に大型の文化や芸術の施設が建築されていく中、アーティストやパフォーマー、

ミュージシャンたちが自由に表現を披露する「自由野 (Freespace fes)」や「自由約 (Freespace happening)」というイベントが2012年ころから開かれるようになった。《自由如緑》の〈序〉では、それらの活動の特徴は「雑」だったと述べられ、植物や雑草の姿と重ねられている。²⁴⁾ ここで言われている「雑」には、「雑多」すなわち多様ということと、雑草がそうであるように自由にどこにでも芽を出して生い茂る野生の植物のたくましさや自主性という意味の両方が込められていると思われる。植物は競争もするが共生もしている。美しく人工的に整備された庭園とは対極にある、自然のままの植物の姿を「雑」と呼び、芸術・文化のあるべき姿として見ている。植物は本来「自由」なのである。

植物の「雑」に理想と憧れを重ねるのは逆に、動物は「不自由」かもしれない。かつて香港という都市を築いたイギリス人は、バードウォッチングや競馬、植物園や動物園を香港に持ちこんだ。植民地に動物園を作り、その檻の中で動物を飼育した。時代は変わったが、現在の動物園は以前のものとは違うと言えるだろうか。西西が「すごい矛盾。いつも会いに行きたいのに／あなたがそこで暮らしているのは見たくない／狭い鉄の檻の中／地面に青い草はなく／頭上に緑の葉はない／動植物公園という名の公園／あなたたちにとっては、どこにもない／山林の空気」²⁵⁾ と言うのはテナガザルのことだけとも思えない。かつてはイギリスの植民地であり、現在は中国と厳しい関係にある香港が動植物公園と檻とに重ねられていることは明らかである。

香港文学館は、2020年に企画による出版物として《文学单身動物園》²⁶⁾ を刊行している。こちらは「单身 (シングル)」であった世界の文学者たち26人について紹介する読み物だ。「動物園」というタイトルは人々が「枠にとらわれ」そこから逸脱する者を許さなかった過去の社会を象徴させようとしてつけられている。カフカ、ジェイン・オースティン、宮沢賢治、アンデルセンなど動物園の動物になぞらえられた世界の文学者・芸術家たちは時代に抗い、「多様性」や「自由」のために新しい道を切り開いてきた人たちでもある。

西西は独自の文学世界を創造してきた作家で、SFやファンタジーにも分類されるような実験的な作品を多数、生み出した。どこにもない、想像の世界を

描いたが、その一方、代表作《我城》を始めとして自分たちの街・香港を描いてきた作家であると認識されている。「肥土鎮」も「浮城」も西西にとっての香港なのである。本稿では動物をテーマにした3つの作品を取り上げたが、《縫熊志》、《猿猴志》を刊行した2009年、2011年と《動物嘉年華》が出版された2022年では西西の状況も、香港や世界の状況も大きく異なる。環境や気候変動など世界規模の課題はより深刻になり、COVID-19は生活や社会に大きな影響を与えている。香港と中国の関係は2019年以降厳しさを増している。西西は《動物嘉年華》の詩で、まずは人間や、人間の築いた社会によって苦しく、悲しい状況に置かれた動物たちへ思いを寄せる。そして同時に、言わば動物たちと同じように、自由や自主性を奪われ、多様性を認められない苦しく、悲しい状況にある人々に寄り添う。自分の理想、未来の希望として西西は詩《動物嘉年華》で「肥土鎮」に「図像動物自由園」を作った。この名称に「自由」という言葉を入れたのは「不自由」な現状に対する西西からのメッセージである。肥土鎮のパークでは、動物と人間の子供たちに違いはなく、マスクも着けていない。

詩の最後、子供たちは世界を旅して「視野を広げ／さまざまな動物たちと知り合うことができる」のあとは、次の2行で締めくくられる。「花花も創作しましたよ／見て下さい、花花の絵はどうですか」。²⁷⁾ 花花は西西と何福仁が飼っていた猫で、西西の作品にたびたび登場する。詩には、西西が描いた猫の花花とその足跡3つのイラストが添えられている。べた、べた、べた。このユーモラスな終わり方は、重さと軽さの両方を、「図文互渉」という独自のスタイルで表現した西西らしい。どんなときも、どの作品にもユーモアと自分らしさを持っていた西西の人柄と願いが凝縮されているようであり、西西から読者へのあいさつにも思える。

(にしゆきこ 茨城大学人文社会科学部)

注

1) 2022年7月、香港中文大学出版。西西著、何福仁編、英文翻訳はJennifer

Feeley (費正華)。

- 2) 香港生まれの作家、詩人。聖保羅書院と香港大学を卒業。2010年に退職するまで、聖保羅書院中国文学科で教授を務めた。
- 3) 2009年9月、香港・三聯書店。
- 4) 2011年8月、台湾・洪範書店。
- 5) 中国語では「終身成就獎」。
- 6) 王家琪による「專訪 (インタビュー)」記事。〈何福仁專訪 (三)：貓奴與西西〉、香港文学館のウェブマガジン《虚詞》に2021年6月29日に掲載されている。
<https://p-articles.com/heteroglossia/2246.html>
- 7) 〈対談：毛熊與漢服〉、《縫熊志》(注3)、p166～p176。
- 8) 第二部〈故事熊〉に掲載された写真は、ぬいぐるみの熊だけではなく、いわゆる小道具にあたるものもとても魅力的である。ぬいぐるみのサイズとつりあう小物類は、ドールハウス、ミニチュアの家具、かわいらしいおもちゃなどで、やがて西西はこれらを題材にエッセイを書く。エッセイは2019年に《我的玩具》にまとめられ、台湾・洪範書店から出版されることになる。
- 9) 1995年、台湾・洪範書店。
- 10) 2001年、台湾・洪範書店。
- 11) 〈受傷的月熊〉、《縫熊志》(注3)、p136～p137。
- 12) 〈前言〉、《猿猴志》(注4)、p9。
- 13) 1992年、台湾・洪範書店。
- 14) 1996年、香港・素葉出版社。
- 15) 2022年、台湾・洪範書店。
- 16) 2022年、香港・中華書局。
- 17) 〈前言〉、《動物嘉年華》(注1)、p7。
- 18) 〈動物嘉年華〉、《動物嘉年華》(注1)、p68～p72。
- 19) 〈動物嘉年華〉、《動物嘉年華》(注1)、p68～p72。
- 20) 〈失去猛犸象的語言〉、《動物嘉年華》(注1)、p14～p15。
- 21) 〈羊駝〉、《動物嘉年華》(注1)、p33。

- 22) 〈肥土鎮的故事〉、《胡子有臉》(1986年、台湾・洪範書店) 所収。
- 23) 2018年、主編・香港文学館、刊行・西九文化区自由空間。
- 24) 茹国烈〈序：栽種自由〉、《自由如綠》(注23)、p30～p31。
- 25) 〈長臂猿〉、《動物嘉年華》(注1)、p20～p21。
- 26) 2020年、虚詞・編、香港文学館・出版。
- 27) 〈動物嘉年華〉、《動物嘉年華》(注1)、p68～p72。